

1. DXの目的を決める

グループのDXの目的は？

- 顧客満足度の向上
 - 効率化
 - 利便性の向上
 - セキュリティの向上
- 管理を容易にする
 - 需要と供給の予測

2. IoTの案

- 成績表をデジタル化する
- 出席を管理する
- 食券をアプリで注文できるように変更
- 図書館の本の予約システム
- 施設の使用状況
- 授業のカレンダー(授業振替や祝日でも学校がある日など)

図書館に決定

顧客の定義

- 図書館の利用者
- 図書館を管理する人間

生産者・従業員・作業者

- 生産者
 - 蔵書管理システムの作者
 - ↑を理解している人間
- 従業員
 - 司書
 - 図書館長(?)
- 作業者
 - 本を予約したい人

DXを構成するサブシステムとしてIoTを捉え、どのようなIoTシステムがDXの共通目的に沿うか考え、IoTシステムを提案する

どのようなデータを集めるか

- 本の貸出状況
- 予約状況

どのようにデータをIoTサーバに送るか

- 使用者が予約したい本を予約する
- 既存のシステム(蔵書検索機能)から貸出状況を抽出

3. 提案された複数のIoTシステムを連携することによって得られる具体的な成果

- 可視化
 - 予約状況
 - 貸出状況
- 傾向分析
 - 新しい本をお勧めする
 - 例:アマゾンの商品おすすめ
- 相対評価
 - 人気な本は何か
- 予測
 - 本がたまたま借りられていたのか、需要過多なのかがわかる
 - 貸出可能になる期間を予測して提供できる